

ふくいミュージアム

2021.9.25 No.64

令和3年度秋季特別展

景色の歴史をたどる ～絵図・地図からみる越前若狭のまちとむら～

令和3年(2021)は、かつての越前国と若狭国がひとつとなり、「福井県」が誕生して140年に当たります。われわれが普段目にする県内各地のまちやむらの景色は、唐突に現代に存在するのではなく、各地の歴史の積み重ねの上に成り立っています。こうした各地の景色の当時の様子が判明する資料として、江戸時代の絵図や、明治時代以降の地図が挙げられます。本展では、絵図や地図を作成するための測量機器や、県内各地の絵図・地図を中心に展示し、まちとむらの景色の歴史を紹介します。また、まちやむらの特徴とともに、景色の中でも変わる部分と変わらない部分に注目し、その背景についても紹介します。本展が、当たり前のものとして見過ごしていた地元の景色の魅力を再発見するきっかけとなれば幸いです。

1. 大地を測る

～江戸時代以降の測量機器と測量術～

私たちは、地表に分布する諸事物を目にすることで景色を認識します。そして、特定範囲の地表の事物を、一定のルール(縮尺や記号)に従って図に示したものを「地図」といいます。一方で、江戸時代以前においては、事物を絵画的に表現した「絵図」が一般的です。絵図は、用途・目的に応じて事物を取捨選択し、ときに縮尺や形などにこだわらずに描かれている特徴があります。

とくに江戸時代は、かつてないほど多種多様な絵図が作成された時代でした。戦国の乱世が終わりを迎え、地域支配や村域確定に際し、各地域の地形や特徴を把握する必要が生じたためです。藩主などの権力者や地域で暮らす庶民など、当時生きた人々は、各地で絵図を作成し、それに伴い測量機器や測量術は洗練されていきました。

測量の基本は、目標物(木や岩など)を見定め、距離を測ることにあります。距離を測る際には、間縄けんわや間棹けんざおと称される、縄や棒状の測量機器が用いられました。時代を経ると、鎖でできた間縄である鎖縄や車型のりょうていしゃりょうていしゃが發明され、より正確かつ効率的に距離が測れるようになっていきました。距離を測る際、道に傾斜がある場合は、その傾斜を測ることも必要になります。その際は、勾配板こうばいばんや象限儀しょうげんぎと称される測量機器が使用されました。方位を測る際には、彎窠羅鍼わんからしんと称される方位磁針が使用されました。そして、こうした測量の記録は、野帳と称される帳簿に記録され、この記録をもとに絵図小屋にて絵図の製図が行われました。製図の際には、渾発こんぱつ、分度矩ぶんどのかね、烏口からすぐちなど製図用具が使用されました。



實測輿地図(複製)
ゼンリンミュージアム所蔵

今年5月に発見が報道された。伊能図の副本

江戸時代の後期には、伊能忠敬(1745-1818)が17年かけ日本全国を実地測量しました。伊能忠敬の死後、弟子達によって文政4年(1821)に完成した「伊能図」と称される日本図は、現代の日本地図とさほど変わらない精度を誇っており、江戸時代の測量術の到達点ともいえます。なお、幕府に提出された伊能図は正本と称されますが、明治6年(1873年)の皇居の大火災の際に焼失しました。現在、正本に準じて制作された副本や、手書きで模写された写本が日本に残されています。なお副本と写本を区分する特徴は「針穴」の有無です。副本には、正本と重ねあわせ模写する際、測量点などに針で穴をあけた針穴がみられますが、写本にはみられません。そのため、副本にみられる針穴の存在は、正本から直接写した可能性が高いことを示しますが、副本の数は非常に少なく、大変貴重なものとされます。

明治時代以降、地図は精密な測量と縮尺に基づき、事物の正確な位置を再現することが重視されました。国内では西洋の技術や知識が普及し、方位と角度を同時に測量できるセオドライト、トータルステーションといった測量機器の開発や、三角点測量など全国統一的な測量がなされました。その結果、地球規模で正確な位置を把握できる地図が作成されるようになっていきました。明治時代以降の地図は、基本的にこうした測量の成果を元に作成されています。現代では、飛行機やヘリコプター、ドローンなどで地上を撮影し、画像データを利用した地図作成などを行う航空測量が行われるようになりました。この成果は、住宅地図やカーナビゲーション、Google Mapなどで使用され、私たちの生活を支えています。

ここでは、象限儀や彎窠羅鍼、伊能図の副本(複製)、トータルステーションなどの資料から、江戸時代から現代までの測量機器と測量術の進歩について紹介します。

2. まちの景色 ~福井、小浜のまち並み~

江戸時代以降、人が多く集まる地域はまちと称されました。江戸時代のまちは、その機能によって、城下町、宿場町、門前町、港町、鉱山町、在郷町などさまざまに分類することができます。とくに、藩主が住まう城が立地する城下町は、藩士や商人など多くの人々が集い、政治的な中心であるとともに経済的中心でもありました。

城下町の中でも、越前国最大の城下町であった福井

城下町と、若狭国最大の城下町であった小浜城下町は、越前若狭の中心的なまちと位置づけることができます。城下町は、城を中心として、家臣らが居住する武家地(侍町)、様々な商人たちが居住する町人町(商人町)、防衛上の要衝に寺社が置かれた寺社地などにより構成されます。

福井城下町は、明治時代以降、堀の埋め立てなどのほか、昭和時代の戦災や震災により景色が大きく変化してきました。一方で小浜城下町は戦災や震災による被害はほとんどなく、小浜西組のまち並みなど、福井城下町に比べ江戸時代以来のまち並みを色濃く残している部分がみられます。

まちは、現在でも人口が集中し、建築物が密集する都市的な景色を呈している傾向があります。これは、



福井御城下之絵図(複製) 当館蔵
原資料:御城下之絵図(松平文庫蔵 福井県文書館保管)



若州小浜細見之図 当館蔵

現在の福井市街や小浜市街にも当てはまります。また、現在のまちは、自家乗用車の普及などによる交通手段の変化により、市街地から離れた「郊外」において、住宅地化、商業地化が進んでいる特徴があります。

ここでは、福井と小浜の景色について、絵図や市街地図などの資料から、景色の変化をたどります。

3. むらの景色 ～海辺、山間、平野のむら～

むらは、家屋と生産領域(海や山林、田畑など)を中心に高札場や地蔵堂、神社などから成り立っています。高札場とは、高札を掲示する場所を指します。高札は、江戸幕府や藩主が決めた規則や掟などを書いた木の板のことで、現在でも高札場があった場所に掲示板が設置されるなど、むらの中心部を示していることがあります。地蔵堂や神社は、むらで暮らす人々の精神的なつながりをもたらす法事や祭礼などの舞台として、現在まで受け継がれてきました。

むらは、主に海辺や山間、平野に位置し、そこに住む人々はそれぞれの環境に適応した生業を営んできました。むらは、江戸時代にはそれぞれ浦方、山方、里方とも称され、明治時代以降は漁村、山村、農村と分類されます。浦方では海や海辺での海産物の生産、山方では山林での薪や炭の生産、里方では田畑での稲作や畑作が生業の中心でした。

海辺のむらは、とくに福井県沿岸部においては、背後に山が控えるむらが多くみられます。そのため、

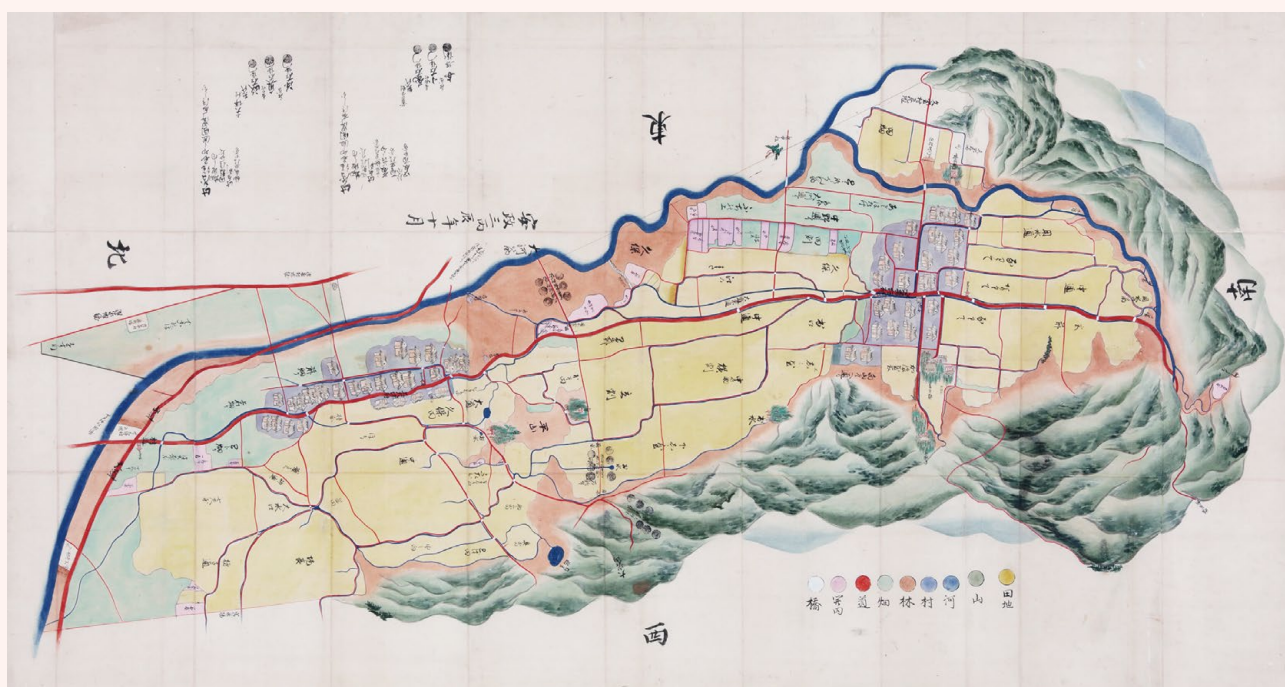
山間部に耕地を持っていたことが特徴的です。数ある海産物の中でも、越前のウニ、若狭の鱒かわいは名産品として知られていました。明治時代以降、海辺のむらでは海水浴文化の受容や国定公園化が進みました。こうした新たな文化や産業の普及に伴い、福井県沿岸部の国道305号線の整備がすすめられ、むらの景色も変容していくこととなりました。

江戸時代の山間のむらでは、家屋周辺の田畑のほか、山林に依拠した生活を行っていました。そうした山から産出される薪や炭は燃料として売買され、経済的に重要な商品となっていました。しかし、第2次世界大戦後には、ダム開発、道路建設など地域開発の進展や、ガスや石油燃料の需要増大に伴い、山間のむらの景色も変容していくこととなりました。

平野のむらでは、主要な生業のひとつが稲作でした。稲には水が不可欠であり、稲作に使う水を用水といいます。用水は川から引いてきますが、江戸時代にはひとつの用水をいくつものむらが使用していました。そのため、用水に沿ってむらが立地し、現在でもその様子を見て取ることができます。平野のむらでは、明治時代以降、耕地整理や土地改良が行われ、田畑の様子が大きく変容していき、現在私たちが目にする景色となっています。

ここでは、県内の海辺・山間・平野のむらについて、絵図や地形図などの資料から、景色の変化をたどります。

(伊藤大生)



上大坪村萱谷村開田二付裁許絵図 当館蔵

豊臣秀吉と笏谷石

—秀吉朱印状の紹介を通じて—

【法 量】縦46.2×横66.3(cm)

【時 代】天正14年(1586) 9月5日

ここに紹介する豊臣秀吉朱印状は、天正13年(1585)から慶長3年(1598)まで越前北庄城主であった堀家に伝来したものです。かつて『大分県史料』(第11巻、1955年)・『増補訂正編年大友史料』(第28巻、1968年)で紹介されていましたが、原本は行方不明になっていました。その後、『福井県史』(資料編2中世、1986年)・『福井市史』(資料編2古代・中世、1989年)などの福井の史料集には採録されておらず、近年刊行された『豊臣秀吉文書集』(第3巻、2017年)では『増補訂正編年大友史料』をもとに再掲載されています。しかし、この度、原本が再発見され、これを当館が購入しました。

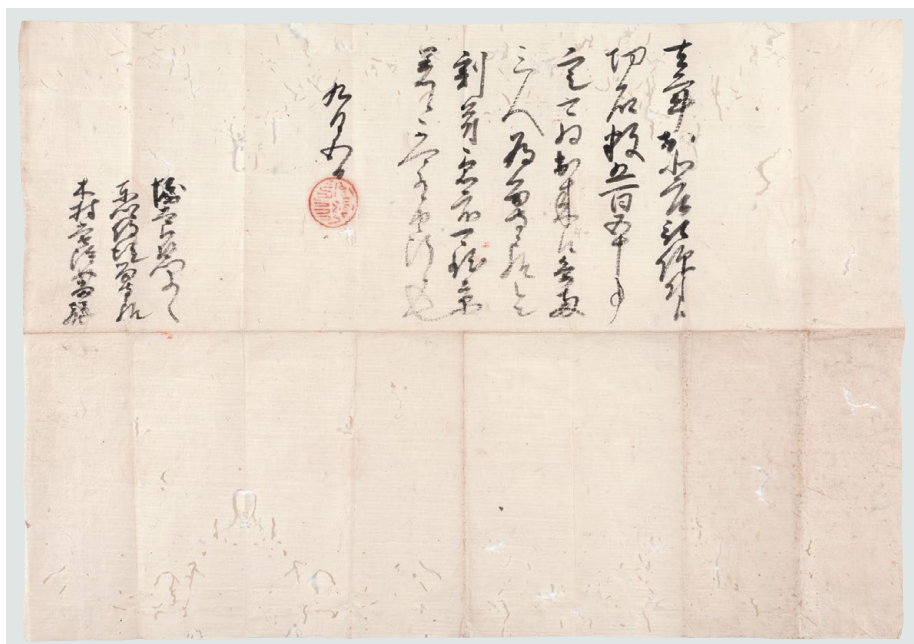
朱印状の差出は天下人たる秀吉で、秀吉が愛用した糸印(中国明代に作られた鑄銅製の印章)による朱印が捺されています。料紙は大高檀紙おおたかたんし(楮で漉いた大振りこうぞで厚手の高級和紙)で、秀吉が自身の権力を誇示するために盛んに用いたものです。

他方、宛先は堀太郎左衛門尉殿・東郷侍従留守居・木村常陸介留守居となっています。従来の史料集では「留守殿」と読んでいますが、これは「留守居」と読むべきでしょう。堀太郎左衛門尉は北庄城主の堀秀政の父で、代官を務めていた人物です。東郷侍従は東郷城主の長谷川秀一を指します。木村常陸介は府中城主の

木村重茲のことです。従って、朱印状は、秀吉から越前の北庄城・東郷城・府中城に在城する代官・留守居の3人に宛てたものとなります。

年号については、諸説あり、『増補訂正編年大友史料』では天正16年、『豊臣秀吉文書集』では天正14年とされていますが、本稿では天正14年説を採用します。というのも、まず、堀秀政・長谷川秀一・木村重茲の3人が秀吉から越前に所領を与えられたのが天正13年閏8月であり、それ以降の年号であることは確実です。加えて、朱印状の冒頭に「去年北庄において(秀吉自身が)指示した切石550個について」とあることから、朱印状が出される前年に秀吉が北庄に出向していたことが分かります。『織豊期主要人物居所集成』(第2版、2017年)によれば、天正13年閏8月以降に秀吉が北庄に居たのは、まさに天正13年閏8月のみです。よって、朱印状の年号・日付は天正14年9月5日と考えて間違いありません。

朱印状の内容は、「去年北庄において(秀吉自身が)指示した切石550個について、きっと用意が出来ることであろうから、留守居として2・3人に割符(物品を移動させる際、数などを照合・確認すること)をさせて、急いで京都に着くように運びなさい。油断があってははいけません」と命じたものです。



豊臣秀吉朱印状 [写真]

その内容で第一に注目したいのは、天正13年閏8月に秀吉が北庄で切石550個を用意せよと指示した点です。天正13年当時、秀吉は越中の佐々成政を攻め、閏8月9日に越前の北庄まで帰陣しました。そこで、越前の仕置(丹羽長重の所領召し上げ、堀秀政・長谷川秀一・木村重茲への所領給付など)を行うとともに、切石の準備も指示したのです。それでは、この切石とは一体何でしょうか。切石とは、種々の形に切った石材を指しますが、わざわざ北庄で指示した点を踏まえると、北庄付近の足羽山で採れる笏谷石の切石と考えられます。笏谷石は凝灰岩(火山噴出物が堆積してできた岩石)で、柔らかく加工しやすいため切石としやすく、青味を帯びた色をしているのが特徴でした。のちに「越前青石」と称され、越前の名産となっています。秀吉はその笏谷石に目を付けていたこととなります。

とすると、秀吉はいつ笏谷石を見たのでしょうか。実は、秀吉は天正13年閏8月以前にも何度か北庄を訪れており、笏谷石を見る機会がありました。とくに、天正11年4月、北庄城に籠る柴田勝家を攻め滅ぼした際に笏谷石を見たと考えられます。というのも、天正9年に実際に北庄を訪れた宣教師のルイス・フロイスが「城の屋根はすべていとも滑らかで、あたかも轆轤ろくろで作ったかのように形の良い石で葺いてあった」「城並びに他の多数の家々の屋根瓦はことごとく立派な石で作られ、その色により城にいつその輝きを添えている」(『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅲ期5・6巻、1991・1992年)と記しているように、北庄城や家々の屋根が笏谷石製の瓦で葺かれていたことが分かるからです。これに関連して、北庄城期(勝家が北庄城の築城を開始した天正3年から結城秀康が入城する慶長6年までの期間を指し、やや幅がある)の遺構からは笏谷石製の板石敷通路・石垣・軒丸瓦なども出土しています(『福井県埋蔵

文化財調査報告』第102集・福井城跡、2008年)。ともあれ、秀吉は「滑らかで」「形の良い」「立派な」笏谷石を実際に見て、その色による輝きを活用しようと考え、切石を準備させていたのではないのでしょうか。

朱印状の内容で第二に注目したいのは、秀吉が笏谷石を京都へ運搬せよと命じた点です。朱印状を発給した天正14年9月前後、秀吉は京都と大坂を行き来しており、この時、京都で進められていたのは、秀吉の邸宅・政庁たる聚楽第の普請でした。秀吉が天正13年閏8月の段階で聚楽第普請の構想を持っていたかどうかは分かりませんが、天正14年2月に着工し、天正15年9月に完成を見たことが知られています。とすれば、秀吉は事前に準備させていた笏谷石を聚楽第普請のために京都へ運搬するように命じたと考えられます。あるいは、堀秀政・長谷川秀一・木村重茲の3人が不在にしていたのも、聚楽第普請のために京都へ上っていたのかもしれませんが、なお、現状、聚楽第の遺構から笏谷石の遺物は見つかっていません。秀吉が笏谷石の運搬を命じたものの、実際に笏谷石が運ばれなかった可能性もあります。また、笏谷石の運搬(あるいは運搬予定)のルートも気になるところですが、詳細は不明です。

このように朱印状を解釈すると、天下人たる秀吉は越前の笏谷石に興味を持ち、聚楽第への活用を構想していたと考えられるのです。

秀吉と笏谷石の関わりについては、実は、朱印状の他、もう一点、従来から知られている史料があります。7月19日付の(北庄)石入・石切衆中へ宛てた長谷川秀一の書状です(「木戸市右衛門家文書」『福井県史』(資料編3中・近世1、1982年)・『福井市史』所収、6頁最下段に翻刻文を掲載)。それによれば、「上様(秀吉)が石船の件をお命じになったので、そのように石切をしてほしい。皆々、精を入れて昼夜を問わず作業し、

去年於北庄被仰付候
 切石數五百五十事、
 定可為出来候条、兩
 三人為留守居令
 割符、急度可致京
 着候、不可有由断候也、
 (天正十四) 九月五日 (豊臣秀吉) 朱印
 堀太郎左衛門尉殿
 (長谷川秀一) 東郷侍從留守居
 (木村重茲) 木村常陸介留守居

豊臣秀吉朱印状 [翻刻]

出来次第進上しなさい。船が損じないように念を入れて一人を添えて進上しなさい。もし(船に)直すべき所が出れば、誰か若い者を一人派遣してください。(秀吉の)御用ですので、少しも油断ないように」とあります。

『福井県史』・『福井市史』ともに、天正13年の書状としており、本稿もそれに従います。まず、長谷川秀一の名乗りが侍従(天正14年4月以降)ではなく藤五となっていることから、天正13年以前の書状と考えられます。次に、天正13年7月当時、秀吉は上方に所在し、越中の佐々成政攻めを決断、越前の丹羽長重に軍勢を催促しており、丹羽長重の出陣中に長谷川秀一を通して(北庄)石入・石切衆中に指示を出したと見られ、そのことが閏8月以降の長谷川秀一による(堀秀政が入部するまでの一時的な)北庄支配および東郷城拝領に繋がっていくと考えれば、天正13年7月19日付の書状とするのが最も自然でしょう。

本状の内容については、『福井県史』は「大坂城修築の際、北庄切石(笏谷石)を石船でもって大坂へ送ったことを証する文書」としていますが、そこまでは読み取れません。むしろ、『福井市史』のように、笏谷石製の石槽(船形)の造作を命じたものと見るべきでしょう。そのように解釈した方が「船が損じないように」「一人を添えて進上しなさい」、「(船に)直すべき所が出れば」「一人派遣してください」という表現も理解できます。また、長谷川秀一が作業を急かしたのは、少なくとも秀吉の越前来訪までには、石槽を完成させたかたのではないのでしょうか。秀吉は石槽を実検し、笏谷石の良さを再確認したうえで、今回紹介した朱印状にあるように、切石の準備を命じたのかもしれませんが。なお、ここに登場する(北庄)石入・石切衆中は、柴田勝家による北庄城・九十九橋築造に関わる

など(「木戸市右衛門家文書」)、歴代の権力者による石切役を負担した職人集団です。歴代の権力者がこうした石切技術を有する職人集団を押さえ、笏谷石を安定的に供給しようとしていた点も注目される点です。

さて、最後に、天下人と言え、秀吉だけでなく、織田信長も笏谷石と関係があったことが知られていますので、その点を紹介します。池田家文庫本「信長記」(信長家臣の太田牛一による自筆本)には、天正9年7月11日に「柴田修理(勝家)越前より黄鷹六連上せ進上并切石数百五十是又進上申され候也」とあり、柴田勝家が越前より切石150個を信長に進上したことが知られています。この切石もやはり笏谷石でしょう。実際に、信長の居城である安土城の遺構として、天守入口に敷き詰められた笏谷石(公益財団法人滋賀県文化財保存協会HP)や天守真下の広場で精巧な作りの笏谷石製桶(赤澤徳明「越前朝倉氏の領国を「石」と「城」から考える」『中近世移行期越前国における都市・地域・権力』2015年)が出土しています。信長も笏谷石を活用していたのです。秀吉もこれに影響を受けた可能性があります。

以上のように、笏谷石は北庄城主であった柴田勝家はもとより、信長・秀吉といった天下人にも好まれていたことが分かります。そうしたことが要因の一つとなり、笏谷石は織豊時代に価値を向上させ、より一層普及していくのではないのでしょうか。

なお、今回紹介した秀吉朱印状については、令和4年3月からの企画展で展示する予定ですので、ぜひご覧ください。

* 赤澤徳明氏・佐藤圭氏に種々ご教示を賜りました。記して謝意を表します。

(大河内勇介)

從^(豊臣秀吉)上様石船之
儀被 仰出候、如
此本きり可申候、
皆々入性^(種)不寄夜
昼可差立候、出来
次第可上候条、ふね
そんし候ハぬやうに
念を入、即一人相
付候て可上候、若
なをし候所も可
在之候間、誰成共
わかき者一人可
頼上候、御用之
事候間、少も油断
候ハ、不可相届候也、
^(長谷川)藤五
七月十九日 秀一(花押)
^(天正十三)
石入
其外
石切衆中

長谷川秀一書状 [翻刻]

しせんきぶん
「四戦紀聞」(写本)

[法 量] 縦19.5×横14.8(cm)

[時 代] 享和2年(1802)

江戸時代の軍記物「四戦紀聞」の写本です。「四戦紀聞」の原本は、宝永2年(1705)に幕臣の根岸直利によって著され、息子の木村高敦により校訂された書物です。徳川家康の戦績から姉川合戦(画像1)、三方ヶ原合戦、賤ヶ岳合戦、長篠合戦について記されており、家康の功績を称えるために著されたとされます。これらのうち、姉川合戦(元亀元年(1570)に近江国姉川(現 滋賀県長浜市)をはさんで織田・徳川軍と浅井・朝倉軍が戦った合戦)の記述と、当館が所蔵する姉川合戦図屏風の描写に一致する点が多いことから、屏風製作の際に参照された、いわば「ネタ本」と考えられています。

江戸時代、書籍は、刊本(木版摺りで製作され、販売されるもの)と、写本(原本もしくは刊本を書き写したものの)2通りの方法で流通していました。「四戦紀聞」には、少なくとも天明4年(1784)刊本と弘化3年(1846)刊本の2種類の刊本が確認されています。また、安永2年(1773)成立の写本(「校正四戦記聞大全」)も知られています。姉川合戦図屏風は、落款により天保8年(1831)製作であることがわかっており、参照しているとすれば天明4年刊本、または宝永2年から天保8年までの間に作成された写本ということになります。今回、紹介する資料(以後、享和2年写本)は、後者に該当します。享和2年写本は和綴じ本で、墨書の本文(漢字カナ交じり)に、朱で点や○印が付されています。奥書(画像2)には「播磨国飾東郡姫京阪椿木堂蔵書」、「椿木享和二壬戌十月木村氏改正ノ書ヲ得テ考之根岸氏ノ書ヲ校正ス」とあります。「播磨国飾東郡姫京阪」は現在の兵庫県姫路市周辺、「椿木(堂)」は写本の作成者と考えられます。

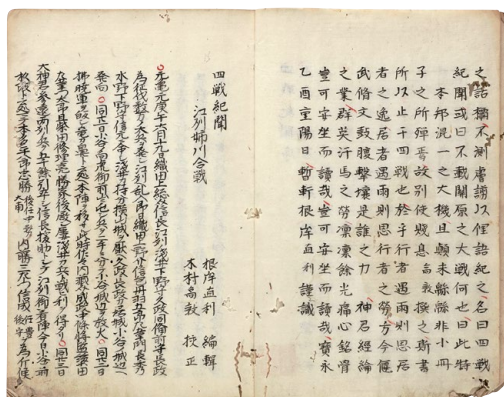
ここでは、屏風との関連から姉川合戦に関する記述を取り上げます。享和2年写本では「江州姉川合戦」と小見出しが付され、16頁にわたって記述されています。

この享和2年写本と天明4年・弘化3年刊本の姉川合戦の記述には大きな相違点があります。両刊本には、姉川をはさんで徳川軍と朝倉軍、織田軍と浅井軍がそれぞれ戦うなかで、徳川軍が朝倉軍を破った後、浅井軍の猛攻に苦戦する織田軍を救援する描写が見られます。しかし、享和2年写本は両刊本には比べて家康が活躍する場面が少なく、例えば、両刊本にある「家康が、家臣の長澤藤蔵に織田軍と浅井軍の戦況を偵察させ、織田軍の苦戦と浅井軍の陣立てに隙がある旨の報告を聞いて姉川の岸まで軍を進めた」という記述はありません。ほかにも相違点があることから、享和2年写本は、天明4年・弘化3年刊本とは異なる系統と考えられます。姉川合戦以外の3つの合戦についても精査が必要ですが、全編にわたって「家康の功績を称える軍記物でありながら、その描写が淡泊である」という特徴があるとすれば、興味深いところです。また、弘化3年刊本の複数の頭注、脇注の内容が享和2年写本の記述と一致しています。弘化3年刊本の頭注には天明4年刊本と一致するものもあり、これら2系統の本を参照したことがうかがえます。

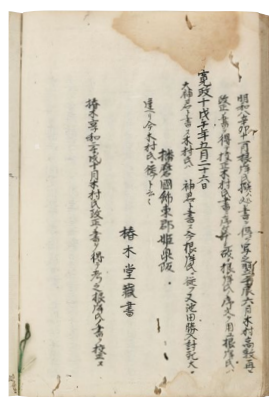
ちなみに、姉川合戦の記述で長澤が登場するのは前述の1箇所だけですが、じつはこの長澤藤蔵は姉川合戦図屏風の第2扇に使番(斥候)の旗印(「五」と記された白旗)を掲げた姿で描かれています(画像3)。この点から、姉川合戦図屏風は、天明4年刊本の系統の「四戦紀聞」を参照したであろうことも推測できます。

いずれにせよ、本資料は、姉川合戦図屏風が作成された天保8年以前には、「四戦紀聞」が刊本だけでなく写本も複数作成されており、しかも地方に流布していたことを示す貴重な資料といえるでしょう。

(瓜生由起)



画像1:「江州姉川合戦」部分



画像2:奥書



画像3:「姉川合戦図屏風」より「長澤藤蔵」

4月

- 3月1日(月)～4月27日(火)
写真展「さくら咲く・ふくいの春～絵葉書でふりかえる～」
(エントランスギャラリー)
- 3月27日(土)～4月25日(日)
資料公開「糸崎の仏舞」(特別展示室)
- 5日(月)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料調査)
- 14日(水)
はたや記念館ゆめおーれ勝山来館(資料返却)
- 17日(土)
高知県立坂本龍馬記念館来館(資料返却)
- 29日(木・祝)～6月22日(火)
写真展「足羽山の情景」(エントランスギャラリー)

5月

- 1日(土)～6月17日(木) ※6月13日(日)までの予定を延長
企画展「1964・東京五輪とそのころの福井」(特別展示室)
- 6日(木)
福井県立子ども歴史文化館来館(資料調査)
- 14日(金)
福井県立子ども歴史文化館来館(資料返却)
- 15日(土)
歴博講座「なぜ『福井県』になったのか」(講堂)
- 16日(日)
企画展「1964・東京五輪とそのころの福井」展示説明会
(特別展示室)
- 22日(土)
福井県陶芸館来館(資料借用)
- 24日(月)
福井県立子ども歴史文化館来館(資料調査)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料調査)
- 26日(水)
福井県立子ども歴史文化館来館(資料調査)
- 26日(水)～6月4日(金)
燻蒸のため休館

6月

- 5日(土)
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター発掘調査成果展示
「昭和のくらし」コーナー夏の模様替え(トピックゾーン)
- 9日(水)
福井県文書館来館(資料調査)

- 16日(水)
南条中学校来館(団体対応)
豊小学校来館(団体対応)
- 17日(木)
岡本小学校来館(団体対応)
- 23日(水)
福井市立郷土博物館来館(資料調査)
- 24日(木)～9月21日(火)
写真展「高校総体1967」(エントランスギャラリー)
- 25日(金)
福井県立子ども歴史文化館来館(資料調査)
武生南小学校来館(団体対応)
- 30日(水)～7月4日(日)
資料燻蒸(殺菌殺虫室)

7月

- 2日(金)
福井県立子ども歴史文化館来館(資料借用)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料借用)
- 4日(日)
はぴりゅう来館(エントランスギャラリー)
- 9日(金)
越前町織田文化歴史館来館(資料調査)
- 23日(金・祝)～8月31日(火)
特別展「福井県野球物語～甲子園をめざした高校球児たち～」
(特別展示室)

8月

- 2日(月)
坂井中学校、進徳小学校教諭職場研修対応
- 3日(火)
福井県立子ども歴史文化館来館(資料調査)
- 6日(金)
大谷大学見学(団体対応)
- 20日(金)～25日(水)
博物館実習
- 21日(土)
歴博講座「福井県野球物語」(講堂)
- 22日(日)
ミュージアム・サポーターズクラブ「昭和のあそび」
はぴりゅう来館



ミュージアム・サポーターズクラブ「昭和のあそび」
(令和3年8月22日(日))

秋季特別展

景色の歴史をたどる

～絵図・地図からみる越前若狭のまちとむら～

開催期間：令和3年10月23日(土)～11月28日(日)
休館日：11月10日(水)、24日(水)

観覧料：一般400円 大学・高校生300円
小中学生・70歳以上の方200円
※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。
公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館くださいますようお願い申し上げます。